東亞産全蠍類脚鬚類の調査（其の五）*

高　島　春　雄

東京文理科大學動物學教室

1 海南島産全蠍類追記

海南島産の蠍に關しては（其の一）に於て既に述べた。其の後諸氏の御厚意により次の諸標品を檢するを得た。

1）瀧庸博士の御芳志によりソンキウ産2頭を調査するを得た。ヒノモトサソリ2♀♀である。1は頭胴長19粍，櫛狀器の齒數右側22本左側20本，他の1は頭胴長19粍，櫛狀器齒數右20本左22本。

2）内田一氏の御芳志により臺北帝大中條道夫氏が 7. XII. 1940 三亞で採集の5頭を檢するを得た。何れもヒノモトサソリである。

3）片岡佐太郎氏の御芳志により氏の令弟が昭和16 年(？）採集された1頭を檢するを得た。ヒノモトサソリ♂で櫛狀器齒數は右21本左20本である。

4）之まで予の檢した海南島産蠍は總べてヒノモトサソリで本種が同島に於て最も普通なるサソリたることを想はしめたが畠山久重氏から拜受した1頭はマダラサソリであつた。4. IX. 1941 三亞産（小林勇吉氏採）の♂で乾燥標品になつて居る。

2 内南洋産全蠍類其の他

松井喜三氏の御芳志により内南洋産蠍5頭を入手するを得た。此の内初めの

---

*(其の一） 琉球列島産全蠍目及脚鬚目　Biogeographica vol. iii, no. 3, pp. 273-285, 4 figs. (1941)

(其の二） 日本産全蠍目及脚鬚目　博物學叢書中の一册として近刊

(其の三） 日本の蠍　寳塚昆蟲館報 no. 10, pp. 1-7, 6 figs. (1941)

(其の四） 日本産全蠍目及脚鬚目知見補遺　Acta Arachnologica vol. vi, no. 3, pp. 87-98, 7 figs. (1941)〔此のものゝ補正 Acta Arachnologica vol. vi, no. 4, pp.149-150 (1941) に出づ〕

1頭は特に生かして持ち歸るべく努力して下さつたのであるが歸りの船中で斃れたのは殘念であつた。マダラサソリは♂の少いことが周知であるが今回松井氏の齎されたのは總べて♂であつた。

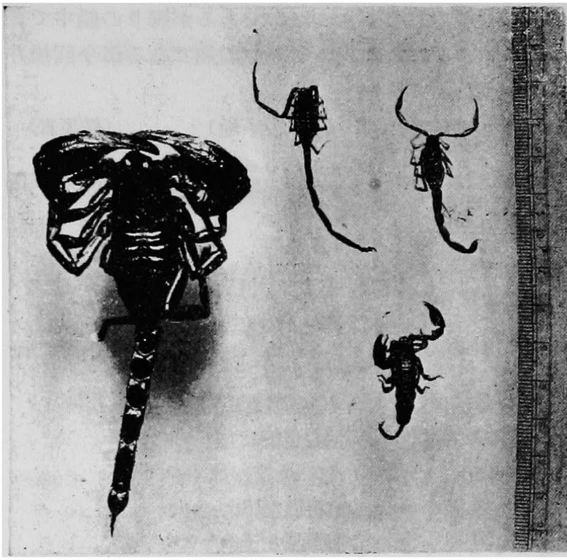
	(種　名)	(性)	(採集年月日)	(產　地)	(採集者)
1	マダラサソリ	♂	24〜25. XII. 1941	パラオ群島コロール島 パラオ熱帶生物研究所內	松井　喜三氏
2	〃	♂	3. XI. 1941	パラオ群島 バベルダオブ島 淸水村	〃
3	〃	♂	〃	〃	〃
4	〃	♂	〃	〃	〃
5	ヤヘヤマサソリ	♀	IV. 1940	マーシャル群島 ラタツク列島 リキエツプ島	阿刀田研二氏

	(頭胴長)	(尾　長)	(櫛狀器齒數)
1	15.5粍	37	左右共18本
2	14.5	28	〃
3	12	25	右折損左18本
4	11	20	右折損左18本ならん
5	13	9	左右共6本

正則中學校教諭堀田隆成氏が出征中中支漢口で I. 1940 採取されたキョクトウサソリ♀を同氏より拜受した。此の蠍に氏は刺螫されたので氏にとり思ひ出の品である。

3 チャグロサソリ

ボルネオ等から乾燥標品になつて大きい黑色のサソリがよく齎される。私もさういふ乾品を1頭(蘭領東ボルネオ產のもので保坂成治氏の寄贈に係る)所持して居る。大きく黑いサソリは南方共榮圏に他にも色々見られるが，私が所持し又他の人がよく所持して居るのは標題のチャグロサソリである。和名は岸田久吉氏 (1939) の所命である。1938年發行の島津動物學標本目錄には誰がつけたものかクロサソリとある。別に私は羽根田彌太博士の御厚意により恐らくボルネオ產かと想はれる♀を拜借するを得た。之も乾品で更に硝子の函內に固定されて居るので精査は出來ない。乾品であるが生時の色彩の保存されて居ることでは或は液浸のもの以上ではないかと考へる。尙他に東京文理科大學動物學教室に保存せられるフォルマリン液浸の1頭 (採集地其の他何一つ手がかりの無いのは遺憾である) も本種の♀なりと想ふ。液浸の爲に變色したらしく體は



南方共榮圏内に見る代表的蠍。右上は海南島產ヒノモトサソリ。右下は琉球西表島產ヤヘヤマサソリ。中は南洋パラオ群島產マダラサソリの雄，右觸鬚は折損して居る。左は記載に用ひたチヤグロサソリ。〔原圖〕

著しく赤褐色になつて居る。以下私の所持する♀に就き外形を記載する（共の寫眞は既に本誌 vol. vi, no. 1 の表紙に揭げた）。

Heterometrus longimauus (Herbst, 1800)

Scorpio longimanus Herbst, Nat. ungefl. Ins. iv, p. 42, pl. II, fig. 1 (1800)

Heterometrus longimanus, Kraepelin, Tierr., Scorp. etc. p. 111 (1899)

Palamnaeus longimanus, Pocock, Fauna Brit. Ind. Arachnida, p. 97 (1900)

色彩　赤味を帶びた黑色で青黑い光澤を放つ。掌や毒囊の上面，頭胸部や前腹部の下面などは赤味が强い。

大腮　第1節は背甲下に隱れ，第2節は基部圓筒狀，上面は上部に少數の毛を生ずるの他は無毛平滑で光澤があり內方は先端銳い鈎となり第　節と共に鉗を形成する。下面は內方より鉗枝にかけ黃色毛刷毛狀に密生する。鉗枝には齒狀突起があり手前の2齒は相接し外方のものは稍々隔たる。第　節は之に對し動鉗子となり下面には刷毛狀に黃色毛を密生するが上面は疎である。鉗枝の內面は溝狀にくり拔かれ上方側のものは3齒（中央のもの最も大），下側のものは無齒で共に先端鈎曲して居る。第2節掌部は鈍黃色，指部は赤褐色。

觸鬚（上面觀）基節は背甲に殆ど隱されて居る。轉節は多少圓形で外方1/3程は周緣弧に近く扁平で，深刻な溝を隔てゝ主部に對する。主部は疣狀の顆粒を列生する。刺毛疎生し2—3本長いのが混つて居る。腿節は上下に扁壓せら

れた圓擣形で大小の顆粒粗に存在するのみ。周縁に顆粒,齒狀に列生し内方では共の下方に更に長い齒狀列がある。刺毛は内外兩側方に長いものを粗生せしめる。第4節脛節は背甲長より稍短く中央を縦走する顆粒列は分水嶺となり,内面は頗る平滑で斜面の極まる所に數本の突起を生ずるが手前の1本のみ棘らしく感ずる長いものである。外面には2條の縦走畝が見え刺毛を粗生すること前節に同じ。第5節掌は厚く上面に於て著しく,不分明な縦走隆起が4條見られる。幅は長さに及ばず,外縁には大なる顆粒齒狀に或は疣狀に列生し内縁は明瞭なる縦畝となる。廣く平滑感あるが網目が殆ど全面に起生して居る。上半は鉤狀で第5節に對し不動の鉗枝となり,内方は先方に次第に鈍となる4齒があり末端は鉤になつて動鉗子に接して居る。上面には1條の平滑な隆起がある。

第6節動鉗子も齒の具合は不動鉗枝に類似し後者の隆起と巧く嚙み合ふ様になつて居る。兩鉗枝共接合面には刺毛が多い。各節何れも黒赤色であるが掌部は特に栗色が強い。

背甲　前縁は正中に於て深く抉られ全體は正中線が明瞭な縦溝になつて左右兩半に區分される。人體の左右兩肺の如き觀がある。兩側及び前葉は特に顆粒が多い。上面は顆粒少く平滑で光澤に富む。中眼丘の兩側は弧狀に窪み正中の縦溝は後縁まで及ばずして短い横の溝を以て杜絶される。それより稍上方に左右1對の深い顯著な溝があり共の上方にも1對のさまで著しからざる溝がある。前葉の側上方にある側眼丘には3對の小眼がある。長さは後腹第3,第4兩節の合長より稍長い。

前腹　第4節まで略々同幅で後のもの程少し宛長さを增す。爾後の部は次第に幅狹まり最後の節は前廣後狹の梯形で凹凸比較的著しく,顆粒に富む。他の節は概して平滑で光澤がある。

櫛狀器　外縁部は大體3部に分たれ　縁部に細毛を粗生,中間部は廣狹2部に分たれる。内縁部は14個位の小球を隔てゝ齒狀突起を列生する。各側14本(但し♂♀共14～16を彷徨するとのことである。別の♀で各側15本なるを檢した),基部は濃黄色であるが主齒部は淡黄色で夫々は廣く中窪みに抉られ切斷せられた狀を示して居る。

後腹　最終節毒囊は赤味強く上面觀は扁平な倒桃實狀,側面も殆ど平滑,先端は長く鋭い毒針となる。下面及び針部には長刺毛を相當數生じて居る。袋刺を缺く。針部は袋部よりも長い。

歩脚　各節は刺毛を粗生する。第6節前跗節には6棘を生じ第7節附節には下面に2列に棘を列生し外側に6(時に7)，内側に4棘あり，先端には2個の顯著なる上爪を生じ下方には小なる下爪1個を有する。

二次性徴　其の後石原保氏の御芳志により東大農學部動物學教室に所藏される本種と考ふべき標品2♂♂2♀♀を検するを得た。一諸にある馬陸や蜘蛛から産地はボルネオと推定するのが最も眞に近い様である。之等は昆蟲標品函内に固定された乾燥標品で上部より窺ふほかは無いので觀察にも計測にも頗る不便である。2♂♂の標品から判斷すると其の二次性徴は觸鬚殊に鉗に求めるのが最もた易く，次で後腹の長さが着目される。雄の後腹は確かに雌のより少しく長い。雄の掌は細長く華奢で側方殆ど平行し幅は長さの半分，下掌部は背甲長を凌ぎ動鉗枝長と殆ど等長である。

測定

(性)	(産地)	(背甲長)*	(前腹長)	(後腹長)	(標品所藏者)
♀	ボルネオ	15.5粍	23	57	高　島
♀	?	15.5	—	59	東京文理大
♀	ボルネオ?	15.5	27	59	東大農學部
♀	〃	15	—	56	〃
♂	〃	15	25	**60**	〃
♂	〃	15	31	**65**	〃

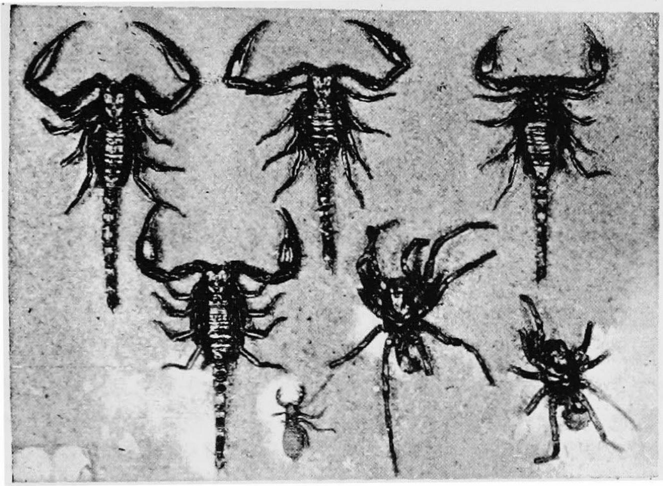
(性)	(産地)	(觸鬚基節長)	(同轉節長)	(同腿節長)	(同脛節長)	(同掌長)	(同指長)
♀	ボルネオ	—	—	14	15	15	18.5
♀	?	—	7	14	15.5	16	19
♀	ボルネオ?	—	6.5	15	15	16	20.5
♀	〃	—	5	13.5	14.5	14.5	17
♂	〃	—	**8**	**20**	**20.5**	**19.5**	**21**
♂	〃	—	**8**	**23**	**23.5**	22	**23**

6個體共乾品或はフォルマリン液浸で計測には頗る不便であり上掲の數字も大體の所を知つて頂く參考程度のものである。

其の後山村八重子女史の御芳志で御所藏の比律賓産チャグロサソリ3頭（ゆつくり拜見したのではないが多分本種であらう），マダラサソリ1頭，ヤヘヤ

---

* 正中で測つたもの。前葉端から測れば夫々は17.5, 17.5, 18, 17, 17, 18 となる。



此の標品の收容されて居るのは普通の昆蟲標品函で其の內法は 33.7×24.7 糎。白く見えるのはナフタリン。上段左と中はチヤグロサソリの♂，右は♀。下段左はチヤグロサソリの♀，其の次はサソリモドキ科の１種 *Thelyphonus* sp.，次の２頭は腹部が縮んで恰好が悪いが *Poecilotheria* 或はそれに近緣の蜘蛛である。〔原圖〕

マサソリ２頭，カニムシモドキ數頭等を拜見するを得た。

分布　本種は分布汎く印度，ビルマ，アンダマン諸島，比律賓（ルソン島には居ない），佛印，マラッカ，支那西南部，スマトラ，ジャヴァ，ボルネオ，モルッカ群島等に及ぶ。

教室主任丘英通博士並びに高槻俊一博士に深甚の敬意を表すると共に文中芳名を錄した各位に謝意を捧げる。

4　參照文獻＊

1894　Tarnani, J.　Quelques nouvelles espèces de Thélyphonides Zool. Anz. vol. xvii, no. 437, pp. 30 - 32

1908　Hanitsch, R. Guide to the Zoological Collections of the Raffles Museum, Singapore pp. 67—68, pl. XVII, fig. 1

1927　Schultze, W. Biology of the large Philippine forest scorpion The Philippine Journal of Science vol. xxxii, no. 3, pp. 375—390, Pls. 1—4

1932　岸田久吉　サソリ　〔平凡社〕大百科事典 vol. x, pp. 509—510

1941　佐藤井岐雄　サソリモドキの生態　Acta Arachnologica vol. vi, no. 3,

＊（其の二）及び（其の四）中に擧げなかつたものゝみを並べる。

pp 72—87, 8 figs.

1941 高島春雄 日本産全蠍目及脚鬚目知見補遺 同上 pp. 87—98, 7 figs,

1941 鹿野忠雄 紅頭嶼生物地理と新ワーレス線北端の改訂 大南洋文化と農業 pp. 119—324, 28 figs. 〔pp. 100—101, fig. 27〕

1941 關口晃一 南洋産の蛛形類, 多足類瞥見 博物學雜誌 vol. xxxviii, no. 72, pp. 26—31, 3 figs. 〔pp. 29—30〕

1942 花井重次 大陸隨想 —その三— さそり 〔東京〕文理科大學新聞 no. 112, p. 3

1942 高島春雄 熱帶の毒虫 東京朝日新聞 nos. 20132—20137

1942 高島春雄 陸の動物 資源と鑑賞南方の生態〔サソリ pp. 54—60, text-fig. 3, Pls. 1, 2 & 3〕

〔追記〕 臺北帝國大學理農學部原田五十吉助教授の御芳志により同大學海南島學術調査隊の齎したサソリ標品の一部を検するを得た。其等は 1) ヒノモトサソリ♀ 櫛狀器齒數右 20 本左 20 本 2) 同♂ 乾品 3) 同♀ 乾品 4) マダラサソリ幼 乾品などで川口四郎 (1939) 田中亮 (XII. 1940) 今村泰 (X. 1941) 諸氏が三亞其の他にて採集されたものである。

寫眞に掲げたチヤグロサソリ 2♂♂ 2♀♀と同じ函にサソリモドキ科の一種が收容されてある。乾燥標品である上殘念なことに蟲害を受け形骸の略々完全なのは觸鬚, 背甲, 右の第 1 乃至第 3 步脚位なもので, 殊に腹部腹面の失せて居るのには困つた。鞭狀物も無くなつて居る。各部の色彩など日本のサソリモドキに酷似して居る。成雌で大體の計測 (單位粍) は體長 30, 背甲長 11, 背甲幅 7, 腹部長 19, 腹部幅 10.5 觸鬚長 11.5, 右第 1 步脚長 31, 右第 2 步脚長 18.5, 右第 3 步脚長 19.5 である。此の標品はサソリモドキとは別屬の *Thelyphonus* Latreille (1802) に屬するものらしく, 種はとても決定出來ないが *Thelyphonus sucki* Kraepelin に近いものゝ樣である。右の種はボルネオ東南部より知られた。*Thelyphonus* 屬 分布に關しては Pocock (1900) はセイロン, 南印度, ビルマ以東フィリピンまで, ソロモン群島に至る Indo-Malay 及び Austro-Malay 地區とし Gravely (1916) はビルマを除く東洋區全般に, 東方はポリネシアまでとした。一方サソリモドキ屬 *Typopeltis* は南は泰, 佛印から東シベリア, 更に香港•廣東あたりから日本の九州にかけての東亞の特産である。